

とはできなくなるということ、無理も言えずに諦めてしまった。

しかし、現地では温かい歓迎を受けた。住職も先頭に立って、案内説明をしてくれた。国情と人情の違いがはっきりと認識された。気持ちだけは、すがすがしい慰霊の誠を捧げることができた。

これで肩の荷が降りたような気持ちになった。日中友好を心から祈り、亡き人々の霊に別れを告げた。戦後生まれの人たちに、あの苦勞が真実として伝わることを祈念しながらこれを書いた。

### 三十八度線を越えて

#### 鎮南浦から引揚げ

神奈川県 二 司 哲 夫

#### 一 海外居住の経緯

国民学校五学年を終えた私と母は、単身赴任中の父に伴われて昭和十七（一九四二）年三月三十一日、関

釜連絡船興安丸に乗船して朝鮮に渡り、四月二日、朝鮮平安南道鎮南浦<sup>チンナムポ</sup>郊外の工場社宅に入居した。昭和十三年、父は信越化学工業直江津工場で、航空機製造に不可欠な金属マグネシウムの製造に関する技術開発に成功し、軍の大量生産要請を受けて同社が設立した朝鮮重化学工業の取締役工場長として原料調達の容易な鎮南浦で昭和十六年五月から工場を建設中だった。

昭和十八年一月この工場は金属マグネシウム製造技術を持たなかった三菱に買収されて社名が三菱マグネシウム工業に変わり、父は取締役工場長として引き続きこの工場に勤務し、同時に三菱化成工業に参事として入社した。

昭和十八年四月一日、国民学校を卒業した私は、知人の勧めで関東州旅順市の官立旅順<sup>リョウシュン</sup>中学校に入学して寄宿舎から通学した。休暇の度に大連<sup>ダイレン</sup>、奉天<sup>ホウテン</sup>（瀋陽）、平壤を経由した片道三十時間を超える苦しい汽車の旅も、今では懐かしい思い出である。しかし、二学年になって体調を崩した私は昭和十九年七月二十日に休学し、同二十四日、鎮南浦の両親のもとに帰っ

た。

鎮南浦は空襲がないためにすこぶる平穏だったが、植民地なので朝鮮人の動向は大きな関心事だった。国民学校に通う約一里の寂しい道で投石や通行妨害を受ける事があり、朝鮮人が日本人に反感を持っている事を子供ながらに感じた。昭和二十年の晩春、防空壕の建設中に朝鮮人の監督が「掘り出した土はすぐそばに置け、平和になった時困るじゃないか」と作業員に指示したが、背後にいる私に気付いて顔色を変えた。その時の気まずい雰囲気、私は地下で何かたくらみが進行している様な気がして不安に襲われた。

昭和二十年七月二十日の休学期間が終わり近付いたので父が学校に連絡したところ、同学年の生徒は学徒動員のためにいないが、ともかく学校まで来るようにと言われた。七月中旬、父は私の旅順までの移動許可を警察署に申請した。なかなか許可が下りないので父は岡山県人会で懇意だった石原署長に直接頼んだが「一週間待ってくれ」と言われた。しかし、一週間後にまた同じ事を言われたので、私は布団袋と行李をそ

のままにして待機した。

## 二 終戦前後の生活の状況

### (一) ソ連の対日参戦

昭和二十年八月八日の深夜、当地ではまれな空襲警報が発令されたので母と防空壕に飛び込んだ。外では何事も起こらなかったが、夜が明けても警報が解除されない、恐る恐る家に入って聞いた六時のラジオニュースでソ連が日本に宣戦布告して満州と朝鮮咸鏡北道に侵攻を始めた事を知った。まさに「前門の虎、後門の狼」である。それがどんなに恐ろしい事を意味するかは、中学生の私にも理解できたので目の前が真っ暗になり旅順中学校との縁が切れた事を悟った。

ソ連参戦後、八月十四日までは重苦しい日々の連続だった。咸鏡北道でソ連軍の侵攻に警察官が小銃で応戦した事が報道された。広島に新型爆弾が投下されたという見出しだけの記事が新聞に出た。ある晩、平安南道の警察最高幹部が「満州から鴨緑江オウリョクコウを越えて多数の工作員が潜入したので注意せよ」と異例の放送をした。またある晩は阿南陸相が絶叫調で「草の根をは

み木の根をかじっても戦い抜くのだ！」と異例の放送をした。ソ連軍の侵攻を逃れて、満州各地から無がい貨車で南下した、多数の幼児を連れた若い女性の大集団（以後満州疎開組と呼ぶ）が鎮南浦に到着して、一部が社宅にもやってきた。父の勤めていた工場では、日本人社員全員に配るために日本刀の鍛造を計画し、八月十四日に研磨前の刀身一振りが我が家にも届けられた。

## (二) 終戦

昭和二十年八月十五日は、朝から勝手口の外で前日届いた刀を研いだ。正午前「重大放送だよ！」と母が叫んだので、急いで家に入ってラジオの前に座った。前日、工場には予告があったようだが父が話さなかったのは私は知らなかった。正午の時報と「ただ今から玉音放送が御座います」のアナウンスに続いて君が代が演奏され玉音放送が始まった。難しい言葉遣いと音声のひずみや雑音のために内容はほとんど分からなかった。ただ「敵は残虐な爆弾を使用し」と「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」が聞き取れたので、本土

決戦の覚悟を促す内容だと思った。しかし、すぐ後のニュースで日本が連合国に無条件降伏した事を知り、私は呆然自失となった。その日の夕方までの事は思い出せない。

日没後、自暴自棄になった父と数人の日本人社員が刀を振り回して社宅を暴れ回ってひんしゆくを買った。そのためか、この夜は朝鮮人の不穏な動きはなかった。ところが、街の中心部では朝鮮人の大集団が日の丸を加工した大極旗を掲げて「マンセー、マンセー（万歳、万歳）」と叫んで練り歩いた事を聞いたので、翌日から夜になると不安のために震えが止まらなくなった。父は警察署に石原署長を訪ねて郊外の社宅の治安問題を相談したが、「どうにもならんよ、おれがやるのはあと一週間だ」と言われて失望して帰ってきた。しかし、その後も平穏な日々が続いたのは幸いだった。

八月下旬、官公庁や大企業は朝鮮人に接収された。ある日の正午、ラジオから『蛍の光』のピアノ旋律が流れ、その後は朝鮮語の放送になった。そして、小銃

を水平に構えた朝鮮人警察官が社宅を一軒ずつ回って、銃砲刀剣類を没収した。ついには父の勤めていた工場も接収された。父を含む日本人全員は外に並ばされて一人一人背後から金物で殴打されたそうだ。新聞がなくなり日本内地の放送が唯一の情報源となったが、復活した天気予報ののんびりした調子に戦争が終わったという感慨に浸ると共に祖国への切ない郷愁を感じた。

父は情報収集のために街の中心部の通信社に良く出掛けた。ある日「朝鮮は北緯三十八度線を境にソ連と米国によって分割占領される」というニュースが入り、居合わせた若い朝鮮人記者が「あー、これでは東洋のバルカンだ」と叫んで頭を抱えてくずおれたそうだ。いつソ連軍の支配下に入り、共産主義体制に移行したのかは郊外の社宅に居たので良く分からなかったが、近くに住む朝鮮人から共産主義の説明会があった事を聞いた。また外出から帰った父は私に、祖父が日露戦争に従軍して受けた功七級金鵄勲章と祖父の軍服姿の写真を急いで焼却するように命じた。

### (三) 社宅の接収とその後の生活状況

九月六日朝、軍用車で乗り付けたソ連軍将校から、「七十二時間以内に社宅を明け渡して街の中心部に移る事、持ち出す荷物は一軒当たり馬車一台に限る事」を命令された。工場建設の最初から駐在して地元を知己が多い父は、この問題の責任者となって直ちに行動し、岡山県人会で懇意だった日本人会会長の湯浅代助氏の全面的協力により全員の移転先が短時間で決まった。荷物の運搬は運送業だった湯浅氏が引き受けた。

九月八日、早朝から小銃を持った多数の朝鮮人が監視する中で社宅を退去した。小さな朝鮮馬が引く大八車程度の約百台の馬車と、高く積み上げた荷物を手で押さえて付き添う人の長い列は、我々の敗戦による労苦の始まりを象徴していた。その日、両親と私は鎮南浦駅に近い漢頭町の湯浅邸の蔵の二階の八畳間に落ち着いた。その二日後、日本人はラジオ受信機を没収されて一切の情報源を失った。

日本人の住宅はソ連軍や北朝鮮当局によって次々に接収された。しかも接収後の移転先で再び接収を受け

る事が多く、その度に荷物の持ち出し制限を受けた。しかし、湯浅邸は最後まで明け渡しを求められなかった。住人も次々に増えて二十二人になった。両親と私、父と同じ工場に勤めていた国米元夫妻、同じく独身の大重正四郎氏の六人は同じ八畳の間に雑魚寝した。

外に出てみると街の様子はすっかり変わっていた。ソ連兵の運転する米国製軍用車が走り回った。中学校の校門に「犬と日本人は入るな」と大書した黒板が置いてあった。湯浅邸の近くに広い青空自由市場が開設されてあらゆる食料品を自由に購入できた。ここは金の世界なので日本人でも不愉快な目に遭う事はなかった。和信百貨店の外壁に「救世主スターリン元師万歳」の大きな垂れ幕が下がっていたが、晩秋から「偉大な指導者金日成將軍万歳」の垂れ幕が加えられた。日本人は就学、行商を含む一切の就業及び市外への移動を禁止されたが、朝鮮人の一般は日本人に対する態度は冷静で治安は良く、外出は自由だった。治安上の最大の不安は、夜になると武装ソ連兵が日本人宅に

押し入って金品を強奪したり女性を要求する事だった。ある晩、湯浅邸にも武装ソ連兵が「マダム ユーアイ（奥さんを出せ）」と押し入ってきたので女性全員が私たちの部屋にだれ込んで来た。電灯を消して息を潜めているとソ連兵の大きな声が階下まで近付いたが、入口のさびた鉄扉の不気味さのためかやがて立ち去った。

一般日本人に対する治安が良かった反面、日本人有力者や元軍人は次々と保安署の雑居房に留置された。父も保安署の雑居房に留置されたが一月ほどで釈放された。父は留置中に暴力を受けた事はなかったが、向かいの独房の石原元警察署長が、毎晩木刀や竹刀で殴打されるのを目撃したそうだ。湯浅邸の隣人の元鉄道員は保安署に留置されて一週間後に帰宅したが、留置中の暴力のために全身に傷を受けて歩けなくなった。元陸軍少尉の国米氏は刑務所に収監された後、他の元在郷軍人と共に列車で連れ去られた。後日の事だが湯浅氏も刑務所に一カ月あまり投獄された。

十月初め、ソ連軍による十五歳以上の日本人男性全

員の強制使役が始まった。私は満十五歳四カ月だったので該当した。最初の仕事は平壤に通じる道路の補修だった。居住地区別に編制された数十人の組が、道路の一区間を割り当てられて路面の凹凸をならす作業だった。みんなやる気がないので自動小銃を持った監督のソ連兵が、あちらを向くと一斉に腰を下ろした。

気が付いたソ連兵が自動小銃を水平に構えて、「ダヴァイ、ダヴァイ（ぐずぐずするな!）」と怒鳴るとだらだらと腰を上げた。「こんな仕事よりも早く帰国して祖国の復興に貢献したい」と皆で愚痴った。数日後、本格的な使役が始まった。毎朝七時に弁当持参で保安署前に集合し、一人から数十人の組に分けられてトラックに乗せられた。私が出た使役は重量物運搬、鉄道保線工夫、職人の手間、ソ連軍兵舎の清掃や雑用等さまざまだった。女性も使役に出て、材木を運んだりしたが長くは続かなかつた。ソ連軍が一番重要視した使役は、農村から貨車で到着した米俵をソ連船に積み込む作業で、体力のある人だけが就業した。初め使役は無報酬だったが数カ月してから日給が出た。しか

し、一般使役の日給は細い朝鮮あめを一本買える程度の金額だった。

一切の収入源を断られた日本人は、住宅接収時に持ち出した少量の衣類や寝具の売り食いで生活を支えた。我が家では、二人連れの朝鮮人ブローカーがソ連人に転売する和服を良く買って行った。彼らが置いて行く赤いソ連軍票は、日本統治時代の通貨が使えない自由市場で食料品を買うために必要だった。

健康問題は大きな関心事だった。終戦の年の秋から日本人の間にマラリアが流行し、母も隔日の悪寒と発熱に悩まされたが自然に治癒した。私は真冬に二回高熱を患ったが、日本人会保健部の市村久三郎医師の往診で流行性感冒と診断された。昭和二十一年一月、国米氏がやせこけた姿で帰宅した。満州東部の延吉に収容されていたが、釈放されて極寒の鮮満国境の山道を徒歩で越え、その後は列車に便乗して帰宅したのだった。しかし、間もなく発疹チフスのために四十度の高熱が続き、ソ連軍の病院に隔離された。数日後に国米夫人も同じ病気で病院に隔離された。その日、母の夜

具にシラミが見つかって大騒ぎになったが、幸いどれも発病しなかった。二人は半月後に全快して退院した。

ある日、湯浅邸が当局に接収され、南浦市中央委員（市役所の幹部）夫妻が一部屋に入居した。我々日本人と台所、風呂、手洗い等が共用なので大変だったが、北朝鮮当局の幹部の質素でない私生活を観察する機会に恵まれて良い参考になった。父は時々その部屋に呼ばれて酒の相手をしたが、その度に「日本人による三十六年間の圧迫」の話が出るのでうんざりしていた。

月日がたつに連れて日本人の生活は悪化の一途をたどった。特に着の身着のままの満州疎開組の人たちの困窮ぶりがよく話題になった。劣悪な居住環境のために冬の間乳幼児の死亡が続発した。毎朝、湯浅邸前の道路を火葬場に向かう小形の棺を二人で担いだ葬列が通ったが、多い日には五組を数えた。

### 三 引揚げ前後の様子

#### (一) 南朝鮮への脱出計画

昭和二十一年の春が来ても引揚げの話は全くなかった。晩春のある日、湯浅氏が私たちの部屋に来て「この夏の生活資金を得るために冬物と夜具を売れば次の冬はもう越せない。日本人会はこれまで正式帰還を願っていたが、満州疎開組を含む全員の徒歩による南朝鮮への脱出を今日決定したので協力願う」と語った。最近、南朝鮮から日本人の密使が日本人会を訪れ、外地からまだ帰還しない邦人の安否を気遣った天皇の御製を示して「黄海道日本人は全員南朝鮮に脱出した、受入態勢はできているので早く南に脱出するように」と促したのでそうだ。八千人の満州疎開組を含む一万六千人全員が徒歩で南朝鮮に脱出する壮大な計画は大きな驚きだった。しかし、日本人社会は活気付いて一斉に引揚げ準備を始めた。私たちも湯浅氏からたくさんの荷物を案に担ぐ方法の指導を受けて、あり合わせの白布で人数分だけのリュックサックを手縫いで作った。

鎮南浦から北緯三十八度線までの直線距離は二十一里だが、すぐ南に横たわる幅の広い大同江のために移

動は簡単ではない。そこで日本人会は多数の小船を雇って対岸に渡り、そこから徒歩で南下する脱出計画を立てた。ある日、湯浅邸では湯浅氏の長男の和平氏と玄関の二畳に住む元軍人の黒木辰雄氏の姿が消えた。湯浅氏に聞いても「いや、ちょっと」と言葉を濁した。その後、黒木氏が私たちの部屋に来て脱出経路の下見と南の受け入れ態勢の確認に行った事を明かした。

五月下旬に待ちに待った脱出が始まった。黄海道への移住を名目とする当局の移動許可を得て、毎日五百ないし七百人が多数の小船で出発した。国米夫妻も出発した。計画された脱出は順調に進み、毎日出発のあいさつに来る人が絶えなかった。ところが約三分の一の出発が終わった六月上旬に当局によって出発が禁止された。そのうちに各地でコレラが流行し、湯浅邸の前の道路上で六月二十一日と七月七日に日本人会保健部のコレラの予防注射を受けた。その後、鎮南浦にもコレラ患者が発生して、七月十日と八月十日にも予防注射を受けたが日本人からは一人の発病者も出なかつ

た。

コレラが終息したので日本人会は残っている一万人あまりを三回に分けて出発させ、野宿が可能な九月中に脱出を完了する計画を立てた。ところが、父が北朝鮮臨時政府化学局囑託として徴用され、家族共々移動を禁止されてしまった。私は二年間も学校に行っていないので、この先いつ帰国して学校に行けるのかと暗たんたる気持ちになった。数日後、父が帰宅して「お前だけ帰国できるぞ」と笑顔で言った。実は抑留命令が出たのは父だけではなかったもので、目前の寒季を控えて背水の構えの日本人会は、この問題が脱出計画を妨げないように抑留技術者に協力を申請すると共に、学齢に達している子供に日本で新しい教育を受けさせたいと当局に嘆願して受け入れられたのだった。しかし、両親を残しての脱出を喜んで良いのかどうか、私の頭は混乱した。

父は元勤めていた工場の倉庫係長だった父のいとこの渡辺宏夫妻および岡山駅まで同行できる久保重男氏と大重氏に私の道中を託した。また、脱出のための人

員編制の中で私は旭町と元町の十九とい団に追加された特別班に漢頭町の二十四とい団から移された。この班は数組の抑留技術者や残留者の子供とその道中を託された人たち、父の勤めていた工場の元常務取締役工場長の清水禮三夫妻など六十二人から成り、班長は同じく元事務部副長の河野善太郎氏だった。

(二) 両親を残して南朝鮮へ脱出

私は、再開後脱出第二団として昭和二十一年九月十七日に出発する事になった。当日の朝はどのように両親に別れを告げたか記憶しないが、母から、日本に着いたら岡山県久米郡打穴村の母の実家に行くように指示された。湯浅夫妻にあいさつして大重氏と手製のリュックサックを背負って外に出た。

ここからは道中で記したメモを帰国直後に補筆した記録に従って話を進める。

九月十七日、午前七時三十分、鈴木倉庫前集合。八時、ふ頭構内整理。乗船予定二千人。九時、保安署員による荷物検査、日本人会帰国担当委員岡藤次郎氏立ち会い。十時、第一船に乗船。乗船の際に若者二人が

タラップ上で保安署員に乗船を拒否された。船は荷物運搬用の小型帆船で、午後からのしげのために船酔いする人が続出した。午後七時半、四船のみ先に出帆。出帆後は帆に強風をはらんで船は滑るように大同江を一東に進んだ。

九月十八日、船は支流の載寧江を南にさかのぼって、午前一時、沙里院南方の三江に到着。船頭が金を要求して接岸しなかったため、一人十円の工作費を出して午後二時に上陸。コレラの予防注射(三円)と保安署員による荷物検査。リンゴ一人一個配付。午後六時、倉庫に入り宿営準備。ジストマのために生水禁止。

九月十九日、午後一時出発。一千人は分かれて延安コースへ。道路上で荷物を牛車に積み込み、久保氏牛車に付き添う。いよいよ北緯三十八度線に近い鶴まで十九里の道を歩き始めた。同行一千人。私たちの仲間は渡辺氏が背負った小型リュックサックの上に三歳の長女をまたがらせ、背負い帯にやかんと鍋をつり下げて、五歳の長男の手を引き、渡辺夫人が零歳の三男

をおぶい、大重氏が途中で必要な荷物を背負い、私が四歳の次男の手を引いた。先頭の引率者グループの次が一人で二、三人の幼児を連れた満州疎開組の若い女性の集団で、その後特別班が続ぎ、最後部がどこにあるのか分からないほど、長い人の列は歩くのが遅い人たちに合わせてゆっくりと進んだ。間もなく載寧保安署が通過を認めないためにその手前で止まった。引率者による長時間の交渉の結果一人十円の工作費を出し、道路から少し入った保安署の玄関前に一人ずつ進み出て最敬礼をさせられた。その後牛車は本道を、人の列は目立たぬように丘陵の山肌を縫う間道を進んだ。この道は雨の時に馬車や牛車がぬかるみに残したわだちが固まった彫りの深い凸凹のために歩きにくかった。やがて渡辺氏の次男が片足をくじいて歩けなくなり、渡辺氏が泣き叫ぶ次男の頭を数分置きに殴って強引に引きずって歩いた。しかし同行の人から注意されてからは、しりやももをつねって立ち上がらせては引きずって歩いた。私は代わって長男の手を引いたが、長男は凸凹道を巧みに歩き続けた。午後九時、松

林で野宿。渡辺氏は暗闇に群がる朝鮮人の子供にリュックサックを取られた。この夜は生まれて初めての野宿だった。夜中に首が冷たくて目が覚めたが、吐く息で毛布の端がぬれたためで、それほど気温は低かった。しかも、澄み切った空一面に輝く無数の星は、美しいと言うよりも恐ろしかった。

九月二十日、午前四時起床、七時出発。十一時、未力通過、河原で昼食。午後五時、鉄橋の下に到着、野宿。工作費一人十円。夕方、頭上を鈴なりの日本人を乗せた列車が二回通過した。これは我々とは別に船で出発し、山江・鶴峴間を鉄道で移動する病人や老人、その家族および支援者等の病人組の人たちだった。

九月二十一日、午前六時出発。新院通過。正午、河原で昼食。午後四時、新酒幕着、保安署員による荷物検査。午後六時出発、暗闇の中を水に入って河を渡る。午後十時、鶴峴駅近くの金山里着、野宿。工作費一人五円、ここまでの牛車代一人百五十五円。

九月二十二日、工作費一人十円。午前六時、全部の荷物を背負って出発。丘陵の松林の細道を進むうちに

病人を寝かせた馬車を連ねた一千人の病人組が追いついて我々の列に割り込んできた。わだちのために凸凹だらけの歩きにくい細道を歩く女性や子供が馬車を避けて逃げ回り大混乱になった。小高い丘の上で双方の団長が激しく言い争う場面もあったが、病人組が先に行く事になり、構わず歩き続ける我々の横を数十台の馬車が通過した。馬方に頻繁にむちを当てられて小さい朝鮮馬が頭を上下に振りながら引く馬車の上で、薄い布団に仰向けに寝た老人が凸凹道の激しい上下振動を歯を食いしばって耐えている姿は痛ましい限りだった。そのうちに「死んでる！」と叫び声がして顔を白布で覆った人を載せた馬車が通過した。そして死んだ人を載せた馬車の数は増える一方だった。この中には早くから朝鮮に移住して功成り名遂げた老人が少なくない事、そのような老人は一步でも祖国に近付いて死にたいという気持ちで脱出行に参加した事を、徒歩組の人たちがささやき合うのが聞こえた。午前十時頃、病人組が通過してから左手の松林の中に死んだ人の周りで合掌している人たちが見えた。やがて後ろから

「死体を捨てたのはだれだ、死体を捨ててはいかん！」と叫びながら小銃を持った保安署員が追い掛けて来た。姿を見せないけれども保安署員が絶えず監視している事が分かってぞっとした。北緯三十八度線が近いので緊張感が漂った。新義州からの脱出団が待ち構えていた多数のソ連軍トラックで新義州に連れ戻された話を思い出した。

午後六時、河揚面着。左右から山すそが迫る狭い平地の小屋の前で保安署員とソ連兵による荷物検査を受け、毛布、ナイフ、小刀およびはさみを没収された。そのまま進んで広い平地に出た所で薄明かりの中に見渡す限りの捨てられた白い荷物を見て息を飲んだ。病人組が持ちきれなくて捨てたのだろうか。幾重にも積まれた白い荷物を踏んで歩くうちに後ろで銃声が出て、銃弾の音が私の左耳をかすめ、すぐ左前に飛び出した保安署員の水平に構えた小銃が立て続けに火を噴いた。一人の男が人の列に転がり込むのが見え、「密行者だ！」と叫ぶ声が聞こえた。日本人に弾が当たったらと思つて身の毛がよだつたが、幸い何事も起こら

ず我々は歩き続けた。午後九時、病人組より先に越境する事になり行動を開始した。暗闇の中で武装ソ連兵に遭遇した話を思い出して極度に緊張した。山あい的小道や田畑の狭いあぜ道を前の人に遅れないように懸命に歩き続けた。ひざまで水に漬かる広い河を二回渡った。丘陵の雑木林を進むうちに引率者グループの人が「ここが三十八度線です」と小声で知らせた。数歩進んだ所で私は立ち止まって振り返った。あの真っ暗な空の下に両親が居るのだと感慨に浸る間もなく同行者に促されて後ろ髪をひかれる思いで何度も振り返りながら歩いた。南の空は街の灯火のためか薄明るく、海風のためか空気の香りが快かった。広い道路に出た所で長い棒を持った数人の追いはぎに遭遇したが、一人約六十円の工作費を出して通してもらった。後味の悪さを噛みしめながら緩い坂道を下り、市街地を通過して夜半に鎮南浦から水行十二里、陸行二十五里の脱出行の終点の青丹駅にたどり着いた。

九月二十三日、未明に「二司、元氣を出せ！」と肩をたたかされて振り返ると湯浅和平氏だった。そして黒

木氏と知人の武本仁平氏もやって来た。湯浅和平氏は鎮南浦の日本人が全員脱出するまでここに残るのださうだ。正午頃、改札口の前で我々の後から着いた人たちが先に列車に乘ろうとして大騒ぎになった。この人たちは九月十三日に出発した再開後脱出第一団から分かれて延安に向かった所、険しい山道や朝鮮人の襲撃のために大変な苦勞の末に、延安でなく青丹に脱出したのださうだ。我々は怒号と罵声の中を先に改札口を入り午後一時発の旅客列車に乗った。超満員で日本人は全員通路に立ったが、私の前に着席した背広姿の朝鮮人が戦艦大和や原子爆彈の事、戦況の真相等話を続けたので退屈しなかった。午後四時、土城着。米軍による荷物検査。セメント倉庫に宿営、最後の米の食事。

九月二十四日、工作費一人十円。鉄道ストのために午後一時から徒歩で開城へ三里。午後五時、米軍が管理する開城天幕村着。入口に出迎えた日本人世話会の人から「北緯三十八度線以北の邦人の脱出を促すために多くの使者を送ったがまだ帰らない人がいる」とい

う悲そう感に満ちた歓迎の辞を聞いた。特別班が入った大型テナントの七十九舎は平壤からの四十二人を含む百十四人のすし詰め、脚を抱えなければ横になれなかった。食事はゆでた大粒の完熟とうもろこし一人一日小わんすり切り一杯で、子供は下痢をした。渡辺氏の三男には乳児用の人工栄養が出た。

九月二十六日、コレラと発疹チフスの予防注射、種痘、DDT散布。翌二十七日、十五人一組の検便。毎日深夜にトラックのごう音と地響きで目が覚めた。日本人の脱出が続くので米軍が百台のトラックを動員して天幕村に輸送しているのだそうだ。十月三日、南里収容所へ移動。十月五日、鉄道スト解除。

(三) 南朝鮮からの帰国

十月六日、午前三時出発。死者三人。厳しい寒さの中を徒歩で移動中、開城駅構内の暗闇の中で柔らかな大きな物につまずいた。後ろで「おじいさんが、だれか助けてくださいー！」と女性の鋭い叫び声が聞こえたが人の流れは変わらなかった。私も前の人に遅れないようにただ歩き続けた。この時の事を思い出すと今

でも心が傷む。午前五時二十五分有がい貨車で、開城発。列車は途中で京城(ソウル)に停車したが、朝鮮に渡った時に両親と特急「あかつき」の二等車から降り立った事を思い出して、現在の境遇の惨めさをかみしめた。午前八時二十五分、龍山着。二円のパン一人一個配付。

十月七日、午前五時龍山発、午前七時仁川着。日本人世話会の人に迎えられる仁川港の中の北バラックに入り、直ちに一人弁当箱一杯の素うどんが出た。その甘くておいしかった事はいつまでも忘れられない。食事はとうもろこし雑炊。ここで朝鮮進駐合衆国軍政長官ローチ少将名の朝鮮からの転住者の証明を兼ねた特別輸送乗車船証明書を渡された。

十月九日、正午前に突然一時間以内の乗船命令を受け、若い米国水兵が運転する多数の小型上陸用舟艇に分乗して、沖合に停泊中の船尾に占領下の日本の旗を掲げた辰日丸(辰馬汽船の戦時標準型貨物船、六千八百九十五トン、昭和二十年三月製造)に到着。タラップの一番下で出迎える数人の正装した上級船員の前を

一段ずつ踏みしめて甲板に上がった。やっと日本からの船に乗船できた安堵感で甲板を歩く足取りは軽かった。特別班は船首に一番近い船倉を木材で三段に仕切った上段に入った。すし詰めだったが脚を少し縮めると横になれた。午後八時、四千人乗船終了。食事は米三こうりゃん七の主食一人一日大わん山盛り二杯。副食物は汁、つくだ煮、たくあん。

十月十日、朝日に輝く小島や白い波頭の上を海鳥が飛び交う日本の眺めは美しかった。午前七時、佐世保灣着。九時から二人一組の検便。十月十七日、特別班の久保、今井両氏がコレラ保菌者の疑いで上陸し、辰日丸は二週間の停船を命じられた。食事は丸麦に変わり、後に押し麦に変わった。二日置き三回の一人ずつの検便は陰性。停船中の死者三十四人。DDT散布二回。

十一月一日、早朝、特別班の若い女性が高热で医務室に移されて昼過ぎにジフテリアで死亡した。私は前日夕食当番でこの女性と重い食物のたるをたくさん運んだ時に、私より力もあり元気だった事を思い出して

激しい衝撃を受けた。急な知らせに河野班長が階段を駆け上がるのと入れ替えに「明日上陸」の知らせで、甲板上に歓声が沸いた。何という運命のいたずらだろうか。

十一月二日、午前六時上陸開始。引揚者専用岸壁で祖国に第一歩を印した。係りの人が「長い間本当にご苦勞様でした」とメガホンで繰り返すのを聞いて感慨無量だった。荷物検査、種痘、コレラと発疹チフスの予防注射、DDT散布の後、徒歩と船で午後一時南風崎の元海兵団着。食事は麦雑炊。不眠不休で手続き。旧日銀券九百二十円を新円に交換。

十一月四日、渡辺一家は尼崎を出発した。私は大重氏と午後十時二十五分、南風崎発の貨車に乗り、翌五日早朝、門司で普通列車に乗り換えて、午後六時岡山着。大重氏と別れて午後七時半発の列車で午後十一時津山線亀甲駅に着いた。ホームに降りて歩き始めた時後から女性の声に呼び止められた。姿は見えないが「石原です、お元気ですね」と言う声の主は保安署に留置後行方不明の石原元鎮南浦警察署長の夫人だった。

途中いつも目立たぬ様に努めていたけれども、両親を残して帰国した私を不びんに思っただけで思わず声を掛けて下さったに違いない。私は真つ暗な貨車の中に向かって深々と頭を下げ、改札口に向かった。私は駅を出て小学生の時に何度か歩いた一里強の道を迷わずに果樹園を営む母の実家にたどり着いた。裏口の扉をたたき、うちに「だれなら」と懐かしい祖父の声がして扉が開き、四十九日十七時間に及んだ私の引揚げは終わった。

私は仁川港で乗船する前日から頑固な下痢に悩まされていたが、ビルマから復員した叔父の「栄養失調だろう」の一言の通り一回の普通の食事で治まった。

#### 四 引揚げ後の生活安定の状況

昭和二十二年一月八日、私は岡山県立津山中学校の二年生に編入学した。その直前の一月四日に佐世保灣で検疫中の栄豊丸から父の葉書が届き、両親が既に帰還している事を知って驚いた。

父は高熱が続いたために医師の診断により抑留を解除されて、昭和二十一年十一月十五日に正式引揚者と

して列車で鎮南浦を出発し、十二月十八日に引揚げ第一船の栄豊丸で元山港を出帆して、同二十一日に佐世保灣に着いたのだった。両親は、岡山県真庭郡久世町の父の妹宅に落ち着くために、昭和二十二年一月二十五日、姫新線久世駅に着いた。浮浪者のような服装で小さなリュックサックを背負い、手にわずかな荷物を持った両親が列車を降りるのを見た瞬間、朝鮮に渡る時に百十個の引越し荷物を送った事を思い出して、今後の我が家の生活の困難さを悟った。

二月二十一日、両親は尼崎市武庫之荘三丁目の自宅に落ち着いた。終戦の一年半前に完成したこの住宅は引揚げ後に残された唯一の財産だった。私は八月からこの自宅で親子水入らずの生活に戻り、九月一日、兵庫県立尼崎中学校三学年に転入学した。これで私の引揚げ記録は大団円を告げるかと思われたが、運命の女神はほほえまなかった。父は鎮南浦の工場が三菱に買収された時、一緒に残留した多くの人たちが着の身着のまま引揚げたうえ、会社解散によって復職先がなくなつて生活に困っているのに、自分だけが三菱に復

職する事はできないと辞表を提出し、再三再四の慰留にもかかわらず三菱化成工業を退職した。父は戦時中、企画院の要職にあった中学の先輩の勧めに従って福井県武生市で自営の金型鋳物製造を始めたが、最初の受注先の違約でつまずき、その後幾度か新事業を立ち上げたが急変する経済情勢に翻ろうされてことごとく失敗し、復興金融公庫からの借入金でドッジラインの実施によって返済不能に陥ったために、尼崎市の自宅を昭和二十四年に失った。この間の我が家の家計は極度の窮乏状態に陥り、私は兵庫県立尼崎高等学校に通学はできたが、費用の掛かる選択科目や行事等を避けて切り抜けざるを得なかった。私は困難に遭遇する度に北朝鮮からの脱出行を思い出して頑張った。

昭和二十五年、父は東京の個人経営の工場に就職して単身赴任し、私の高校卒業を機に東京に転居する事になった。父から大学に進学したければ家計の事情で自宅から通える国立大学に限ると言われたために、私は受験準備に全力を尽くし、昭和二十六年三月、東京大学理科一類に合格した。ところが身体検査で肺結核

が見つかかったので入学許可と同時に休学を命じられ、私は暗闇の中に投げ込まれた。引揚げ後の約十年間は両親も度々体調不良に悩まされたが、戦中戦後の働き過ぎと心労はもとより、戦後の生活困窮時の栄養不足が大きな影響を与えた事は疑いない。

昭和二十六年末、父は勤め先の倒産で失業し、翌年一月、信越化学工業に嘱託として再入社した。父はその後、次第に重用されて家計も好転し、住宅金融公庫と会社からの借入金で小さな住宅を建てて、昭和二十八年五月一日に入居した。私は二年間の自宅療養を終えてこの年の四月に復学し、二年後に理学部物理学科地球物理学課程に進学して、父の勧めで研究者になる事を夢見ていた。しかし、父は昭和三十一年三月四日、庭木の手入れ中にだれにもみとられずに急死した。蓄えがないうえに収入がなくなつたので、我が家の家計は再び危機に陥ったが、私の卒業まであと一年だったので乗り越える事ができた。私は求人に応募して三菱鉱業に採用され、昭和三十二年四月一日から長崎港外の高島炭鉱に勤務した。安いながらも毎月の給

料で生活は安定し、私の戦後は終わった。

## 五 おわりに

その後、日本は平和の国是の下に終戦直後には想像もできなかったほどの目覚ましい発展を遂げて経済大国と呼ばれるようになった。引き揚げてから五十四年、この豊かで安定した祖国での生活を振り返って平和の尊さを子子孫孫に伝え、この引揚げ記録のような苦勞を再び経験する事がないように切に祈りたい。

本文を終わるに当たり、引揚げの際にお世話になった多くの方々に感謝すると共に、帰国の夢を果たせず途中で亡くなった方々に心から哀悼の意を表します。

## 朔州から決死の脱出

### 三十八度線を突破して

京都府 温 品 廣 助

## 一 生い立ち

私の父は明治三十一（一八九八）年生まれで、大正

時代、旧制高等商業学校を卒業と同時に、当時関西を中心に活動する糸偏系商社に入社し、間もなく上海支店へ転勤した。大正末期に母と結婚後も引き続き同支店に勤務した。兄も上海生まれ、私も昭和五（一九三〇）年、上海市東照里で生まれて、幼稚園の頃までそこに住んでいた。幼稚園は知恩院幼稚園といって、上海海軍陸戦隊本部のすぐ近くにあった。幼稚園を卒業した時に、施高塔路、千愛里に引越して、北四川路の第一北部小学校に入学した。三年に進級するとき、新設の第五小学校に編入されることになった。昭和十八年に小学校を卒業して四月に上海中学校に入学した。千愛里では、父母と兄の家族四人と、住み込みのお手伝いが一人の五人住まいであった。衣食住、何の自由もなく、大東亜戦争へ突入とともに、軍国少年の一員として節度ある楽しい時期を過ごすことができた。

## 二 北朝鮮朔州で終戦

大東亜戦争が始まったのは昭和十六年十二月八日、私が第五小学校五年生の時だった。この日、日本軍のハワイ真珠湾奇襲攻撃にあわせ、上海では支那方面艦